

「私とチャペルとオルガンと」
～明治学院礼拝堂献堂100年に寄せて～

小杉義信（社会福祉学科1982年卒）

私の学生時代、チャペルアワーは1時限目と2時限目の間に設けられていましたが、チャペルの中には数名の学生と教職員という日々でした。しかし、毎週火曜日の英語礼拝には多くの学生が集まってきました。宣教師として来学し、教鞭も執っておられたnativeの先生がメッセージをされたのです。nativeの英語にチャペルで触れる、それはミッションスクールの薫りを肌で感じる時でした。チャペルアワーを語る時、三浦正雄さんを抜きに語ることはできません。三浦さんは、雨の日も風の日も「今日のチャペルアワーは・・・」とトラメガを肩からさげて構内をアナウンスして歩かれました。このことができたのは、後にも先にも三浦さんだけです。また、私にとってチャペルのオルガンと言え、正面に据えられた天使が羽を広げたような美しい姿のオルガンです。オルガンは遠くから眺めるだけのものでした。ところが大学2年生になった時、どんな経緯があったのか記憶が曖昧ですが、オルガニストを務めておられた園部順夫先生からオルガン演奏の手ほどきを受ける機会を得たのです。演奏台に座り、オルガンを弾いた時、私を包み込んだ音色を忘れることはありません。

2016年は明治学院礼拝堂献堂100年の節目の年。今も明治学院が大切に守る「心」を語り続けています。